

覇権交代2

孤立する日米

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 安田忠幸

目次

プロローグ	11
第一章 塹壕戦	16
第二章 スイッチブレード	35
第三章 クイックストライク機雷	62
第四章 吉野ヶ里	90
第五章 逃避行	118
第六章 キリングゾーン	145
第七章 ハマーヘッド作戦	169
第八章 分断	198
エピローグ	221

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうへい
土門康平 一佐。ようやく昇進したことで、浮かれ気味。部下には辟易されている。コードネーム：マウナケア。

〔原田小隊〕

はらだたくみ
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

はたけともゆき
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだはるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずのともお
水野智雄 一曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐちしんた
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひみ
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

〔姜小隊〕

かんあや か
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引く張られる。コードネーム：マカルー。

うるしぼらたけとみ
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 一曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チエスト。

い い かける
井伊翔 一曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

み どう そう ま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこうじ さねあつ
姉小路実篤 二曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：
ボーンズ。

かわにしまさふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆらしんじ
由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：
ニードル。

おだぎりしよう
小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイ
ス。

あびるあきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：
ダック。

あかばねたくま
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネー
ム：シェフ。

〔訓練小隊〕

あまひひろし
甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田拓海一尉
の同期。

〈水陸機動団〉

しばひかる
司馬光 水陸機動団教官。香港に潜入して、本土派と接触している。

うえぞのひろき
上園広樹 陸将補。水陸機動団長。

はかまだてるお
袴田輝男 一佐。水陸機動団幕僚長。

むなかたしん
宗像晋 二佐。第一水陸機動連隊第二中隊長。

いわながはまれ
岩永誉 一尉。第一水陸機動連隊第二中隊第一小隊を率いる。

たつむらしげと
達村茂人 曹長。岩永誉一尉の女房役。

さかさばらけいすけ
榊原啓介 三曹。地元は九州。

〈第一ヘリコプター団〉

むらたもりと
村田護人 三佐。村田家次男。

むらたりんこ
村田凜子 一尉。村田護人の妹。明野で偵察ヘリに乗っていた。

《海上自衛隊》

〔南支派遣艦隊〕

たかとおまさや
高遠雅也 海将補。南支派遣艦隊司令を務める。

そめやとしお
染谷俊雄 一佐。首席幕僚。

ばんどうかむと
板東兼人 一佐。`かが、艦長。

かおさか
兼坂すみれ 二佐。艦隊情報幕僚。

〔第七航空隊〕

藤原美沙^{ふじわら みさ} 二佐。岩国基地第九一航空隊司令。回転翼パイロットとしてスタートし、後に双発に転じ、海自初のジェットであるU-36Aのライセンスももつ。

〔インド洋派遣艦隊〕

五味勇美^{ごみ いさみ} 海将。連合艦隊司令長官。航空集団司令から、自衛艦隊司令を最後に退官。P-3C乗りで、藤原美沙の父親に鍛えられた。

江川俊樹^{えがわとしき} 海将補。

竹内幸輔^{たけうちこうすけ} 一佐。作戦幕僚。

〔ヘリ搭載護衛艦「ほうしょう」〕

泉田宣泳^{いづみ だ せんえい} 一佐。艦長。

橋口肇^{はしぐちはじめ} 二佐。副長。

宮城明日香^{みやぎ あすか} 一尉。気象班長。

〈航空自衛隊〉

（二〇二飛行隊）

村田先斗^{むらた きたと} 二佐。F-35Aに乗る。村田護人、凜子の兄。

////// アメリカ //////////////////////////////////////

《アメリカ合衆国大統領行政府》

エリザベス・ケンジントン 大統領。

ケイティ・ヘンドリクセン 国務長官。

コリン・コンラッド 大統領首席補佐官。アマンダ・マクノートンの上司。

アマンダ・マクノートン 新補佐官。安全保障問題担当次席補佐官から国家安全保障問題大統領補佐官へ就任。

クインシー・ショー ホワイトハウス広報室長。

〈海兵隊〉

セリーヌ・D・タッカー 海軍少将。少将に出世したばかりの女性。

（第三海兵遠征軍）

ウェイン・R・ヴァンペルト 中将。第三海兵遠征軍司令官。海南島攻略作戦の指揮をとる。

グレン・ギャレス 少将。参謀長。

キャスリーン・アイザック 中佐。航空参謀。F-35 Bのパイロット。

(第三海兵師団第三偵察大隊B中隊)

アルベルト・タイラー 中尉。第三海兵師団第三偵察大隊B中隊
フォース・リーコン
武装偵察隊を指揮。

エイベル・リンカーン 曹長。アルベルト・タイラーの中尉の女房役。

グレイグ・フィリップス 伍長。

中国

《中央弁公庁》

ファンシェンホマオ
範 学毛 中国共産党中央弁公庁主任。

〈陸軍〉

(海南島独立守備隊)

マオアイチュン
毛愛軍 少将。海南島独立守備隊を率いる。出世や賄賂とは無縁な
軍人生活を送ってきた、ゲリラ戦研究の第一人者。

ホアンクアンイン
黄 冠英 大佐。作戦参謀。

(第五技術情報大隊)

ワンシュエビン
万学兵 大佐。優秀な分析官で、英語講座を持つほどのインテリ。
一年前、瀋陽で暮らしていた一人娘が交通事故で死亡している。

(第22連隊)

チエンホンダ
銭 宏大 中佐。第22連隊政治将校団副隊長。

ホウワイエ
侯燁 少佐。銭の部下。

大韓民国

《国家情報院》

リュジンニ
柳珍熙 副長官。

チジュンユル
池俊烈 中佐。副理事官。

〈空軍〉

(第11戦闘航空団)

ソンキョンテ
孫庚泰 少将。航空団を指揮する。

オキョンジュ
吳京周 中佐。第112戦闘飛行隊を率いる。

ビョングァンミン
辺光敏 少佐。飛行隊の副隊長。

〈海軍〉

キムジンイル
金真一 少将。韓米同盟艦隊司令官。

〈海兵隊〉

ソンジュウオン
孫周原 少将。海兵隊部隊を率いる。

クンヒヨサン
斤孝相 大佐。

バクミンテ
白珉台 中佐。第二三四海兵予備役中隊を率いる。元は韓国最大の軍事顧問会社の中東派遣部隊を率いていた。

チヨンデウン
鄭大恩 少佐。副隊長。

（第二海兵師団）

ユンベクヨン
尹白龍 大佐。第二海兵師団第二戦車大隊を率いる。

覇権交代2 孤立する日米

プロローグ

川崎市かわさきの南武朝鮮初級学校は、東急田園都市線とJR南武線が交差する溝みぞの口駅くちから、ほぼ南武線に沿うように川崎寄り徒歩十数分の場所にある。この辺り一帯は昔、工場街だった。名だたる家電メーカーの工場が建ち並んでいたが、今は僅かに研究施設が残るのみである。

溝の口駅北口の超一等地にあった南武朝鮮学校も、駅前の再開発事業でここに引越し、跡地には今はデパートが建っている。

朝鮮学校から建物ひとつ挟んで建つ高津警察署たかつ末長交番すえながで夜勤に当たる小野匠おののたくみ巡査長は、朝鮮学校の教師らと知り合った時、そんな話を聞かさ

れたことがある。

この交番の主な目的のひとつは、学校に通う子供たちの安全確保。昨今ヘイト犯罪が増え、拳げ句にここ川崎市がその主戦場となったことで、県警は事実ぴりぴりしていた。

公園のベンチ等へのヘイト落書きは全国ニュースにもなり、パトロールでの見回りも欠かせなくなった。

こんな平和な街に憎悪を滾たぎらせて暮らす人々がいることが、小野には信じられない。勤務中、ニュースは見聞きしない。九州で起こった大惨事について、署を出る時にちらっと聞いただけだ。

小野は大分^{おおいたべつ}別府の出身だが、あれこれ心配してもここでできることは何もないからだ。

だが深夜になると、気になる事件が発生した。

川崎駅東口の繁華街で酔客同士の喧嘩があり、台湾^{わん}人観光客が刺されて一人死亡したというのだ。

犯人のサラリーマンはその場で取り押さえられたが、韓国人観光客と誤解して刺したということがわかり、すぐさま県警地域課から県内の警察署や交番へ「ヘイト・クライムを警戒せよ」との警報が出された。

それから一時間もしないうちに、自転車でパトロールに出た小野は、寺の隣の小さな公園で、木製ベンチに落書きがされているのを発見した。白いペンキで、筆を使って塗られている。ペン先で引っかけてみると、まだ完全には乾いていなかった。犯行後一時間というところだろう。

証拠写真を撮り、署に連絡してから交番に戻る。

すぐ報告書を書かねばならない。明日朝一で現場検証、区の担当者との役人も来て確認した後、グラインダーをかけてそのペンキを剥がすことになる。

ここ数年、沿線の公園にあるベンチの半分がそのような被害を受けた。ベンチが無い場所では、柱や看板に悪戯書きをされる。見つけては消すのイタチごっこだ。

交番で報告書を認^{したた}めていると、署から無線が入った。朝鮮学校の正門に不審者が集まっているとのことだ。一人では心細かったが、同僚の警官はO.L宅の下着窃盗現場に事情聴取に出かけたまま戻ってきていない。

そう言えば、先ほど誰かが通りを歩いていた。電車も終わったこの時間帯にしては珍しいが、こんな大都会で、深夜に出歩いていたからといちいち職質していたら仕事にならない。

朝鮮学校の、歩道から少し奥まった正門前に向かうと七、八人の男達が集まっていた。皆、金属バットやゴルフクラブを持っている。

毎朝、正門前に出て子供たちを出迎えているベテラン教師も、金属バットを握る一人だ。

「李先生、これは何の集会ですか？」と小野は穏やかに呼びかけた。

「学校を守っています。全国で在日への襲撃が頻発しているので」

「それは変な話だ。ミサイルを撃ち込んだのは韓国であつて、ここは朝鮮学校だから関係ないでしょう」

「日本人にとっては、南も北も一緒だ」

保護者らしき男性がそう反論した。

「先生、金属バットを持ち歩くのは銃刀法違反です。ゴルフクラブも同じ。この人数が集まれば、立派な凶器準備集合罪ですよ。説教だけじゃ済ま

なくなる。ここは交番のすぐ隣で、われわれがいつも巡回している。解散して、大人しく帰宅してください。自分がここから署に連絡したら、もう書類送検の手続きを止められなくなる」

「お巡りさんが巡回したからって、ヘイトな落書きを止められなかったじゃないか」

「そうかもしれませんが、これはよくない。気持ちにはわかりますし、学校は警察が全力で守ります。すぐ解散して帰宅しなさい」

その瞬間、男たちの背後で何かが光った。グラウンドに面した校舎の一階外の壁で突然炎が上がったのだ。あつという間に二〇メートルくらいの長さで、教室ひと部屋分の炎が窓の外で上がる。

黒い人影が、隣のマンシオン方向へと走るのが一瞬見えた。

「犯人は裏だ！ マンシオンに逃げたぞ」そう叫んで、男達が一斉に走り出そうとする。

「火を消すのが先だろう！」

小野は彼らの前に立ち塞がった。

「あなたは向かいのコンビニから消火器を。あなたは交番に走れ！ 机の横に消火器がある。先生は門を開けて！」

「鍵は管理職しかもっていない」

「じゃあ、門扉を越えるしかない。残りは校内に入っておりたけの消火器と水を用意しろ！」

犯人を追うべきかとも思ったが、一人ではどうにもならない。まずは消火が先だ。

門扉を乗り越え、グラウンドを走りながら本署に無線を入れると、六〇〇メートル東にある高津消防署新作出張所しんさくからすぐサイレンが聞こえてくる。だが、サイレンが聞こえるだけで、なかなか消防車は辿りつかない。

撒かれていたのは、ガソリンだった。消火器が一本、二本と集まり、四本目がやって来た頃、よ

うやく消防車が到着した。

幸い、児童らの植木鉢数個と、教室の窓ガラスを何枚か割っただけで火は消し止められた。カーテンに燃え移っていたらやっかいなことになっていたが、どうにかそれは阻止そしできた。

消防隊員が、保護者らの怪我の有無を確認する。皆大なり小なり煙を吸い、煤を被っていた。

李先生は、グラウンドへと降りる階段に座り込んでいる。ずぶ濡れで、途方に暮れた表情をしていた。「先生、お怪我は」と言いながら、小野もその隣に座り込む。

消防士が、ペットボトルを差し出してくれた。鎮火した時には、救急車や消防車が一〇台ばかり到着していた。煙を吸って肺を傷つけている可能性があるから、このまま救急車に乗って病院に行くようにと忠告される。

「……これから、どうなると思います？ 朝鮮人

が自作自演で放火したんだと、ネットで書かれるんですよ」

「自分がどうこう言える立場じゃないが、子供たちの安全のためには、しばらく休校にするしかないでしょうね」

「変な話だ。中国と戦争しているからって、誰も横浜の中華街を焼き討ちしようとは思わない。だけれど韓国が相手だとすぐこういう話になる。これが差別でなくて、何なんですか」

「お恥ずかしい限りです。そもそも、隣国同士で戦争していること自体が、どうかしている……」

韓国軍の玄武^{ヒョヌム}ミサイルが九州に襲来し、大きな犠牲を出したその夜、日本全国で、ヘイト犯罪が相次いだ。

韓国風小料理屋やバー、焼き肉店が放火され、韓流ドラマのDVDを並べているというだけでレ

ンタル屋の看板や窓が破壊された。

日本は、アメリカとともに太平洋で戦っていた。南シナ海に築かれた中国の埋め立て基地を破壊し、海南島近くの基地から戦闘機を飛ばしていた。中国はハワイ、オアフ島の占領を試みたが失敗し、アメリカはその報復として、香港で独立を煽り、中国最南端の海南島に海兵隊を上陸させる。

アメリカがハワイを奪還したことで和平の機運が高まるかと世界が期待したが、中国が韓国を取り込むと、戦いは一層激しさを増した。そして、大陸には二度と出兵しないはずだった日本も、アメリカの同盟国としての立場を表明するために水陸機動団を海南島に上陸させたのだ。

そこは、かつて旧日本軍が占領し、七年間、過酷な占領政策を布いた場所だった。

第一章 塹壕戦

水陸機動団は、海南島南西部のリゾートビーチに上陸し、そこで一晩過ごした後に北上して、陵^{リッジ}水郡^{シュイ}のリンシュイ空軍基地を占領した。

ここは、人民解放軍の海空軍部隊が展開しているのみならず、大規模な電子情報収集部隊もいたが、抵抗はなく、一発も撃たずに占領することができた。

だが基地のすぐ西側には、敵が立て籠もるに絶好の山があった。事前にB-52H爆撃機が飛来し山容が変わるほどの爆弾の雨を降らせたが、トンネルを張り巡らせた地下基地は健在で、暗くなるのを待ってから敵が仕掛けてきたのだ。

そこを単独で守る自衛隊側は、塹壕を掘って十分^{十分}に備えていたが、戦闘は過酷なものとなった。とりわけ山裾に誘導路の一部がかかる滑走路の北西側の戦闘は、凄まじかった。機動団側は、最も過酷な戦闘が想定されるその場所に、《上真田丸^{さなだ}》《下真田丸^{まると}》と名付けた半円形の巨大陣地を構築して備えた。

このエリアを守るのは、第一水陸機動連隊第二中隊と、習志野第一空挺団・第四〇三本部管理中隊、その実特殊作戦群隷下の特殊部隊サイレント・コアの一個小隊だった。

第二中隊の一個小隊を率いる岩永誉一尉^{いわながほまれ}は、

最も敵に近い下真田丸の陣地を預かっていた。指揮所は、真田丸後方に控えるAAV7に置いていたが、自分だけ車両の中に留まりそこより遙か前方に部下を出しているのも居心地が悪いので、今は塹壕の中に出てきていた。

それに、AAV7が安全だとも思えなかったのだ。車両の三方を盛り土で囲んでRPG対策にしていたが、何しろ目立つ。集中して攻撃を受けそうな気がした。中隊からも、装甲車両には射手だけ置いて、車両の近くには固まるなと命じられていた。

第一波の攻撃がはじまった時、岩永はまるで土石流のようだと感じた。その理由は、照明弾が上がったことですぐわかる。

爆撃でなぎ倒された木々が、兵士達を巻き込め、一緒に斜面を転げ落ちてきたのだ。

兵士達何人かがその波に巻き込まれ、まるで糸

が切れた操り人形のように手足をあり得ない角度に曲げながら落ちてくる。

ほんの一握りの敵兵が、流れ落ちた木が溜まった場所を遮蔽物として撃ってきた。だが、隊員が八九式で発砲する前に、背後から重機関銃が火を噴いて黙らせた。

木々も碎けて宙に舞う。暗視ゴーグルで見ると、葉っぱとは違う何か温度をもったものも宙に舞っていたが、それは人間の肉片だ。

緒戦は、ほんの三〇秒で終わった。

出てきた敵は、おそらく一〇〇人ほどだったろう。すぐにその場は、うめき声で満たされた。叫び声も聞こえるが、中国語のそれは何と言っているのかわからない。「ヘルプ、ヘルプ！」と聞こえてくるが、どうすることもできない。

味方の照明弾は、三〇分ほど上がり続けたが、その後ふつりと止んだ。敵の攻撃がしばらくは

なさそうだという判断と、こちらの方が夜間の戦場監視能力では優れている、圧倒しているという理由らしい。本音はもちろん、限られる照明弾を節約するためだ。

銃撃が収まってから、岩永は耳栓を外してみた。何か空気が抜けるようなシュー！ という音がしている。

おそらく、土囊どのおうからだ。土囊に弾が当たり、中の砂が流れ出ていく音だろう。土囊の中で土が固まる時間がなかった。仕方ないことだ。

この攻撃を数波食らうと、塹壕の外に積み上げた土囊の高さは半分以下になるだろう。

弓状に膨らんだ塹壕の一番山側では、六名が等間隔で固まっていた。手榴弾が投げ込まれた時に備えて、足下はフラットではなく波形に掘ってある。爆風が塹壕を伝わり、近くの兵士を巻き込まないようにだ。

だから、何かあっても走って逃げるといわけにはいかない。逆に、敵がなだれ込んできても、足下をすくわれる羽目になる。

敵側から、英語の叫び声が聞こえてきた。「撃つな！」と繰り返している。誰かが投降してくるようで、岩永は「撃つな、様子を見守れ！」と命じた。

だが右手にタオルか何かを振り回して這うように斜面を降りてきた敵は、二〇メートルと移動せずに背後から狙撃されて前方へ派手に倒れる。そのまま一〇メートルほどずり落ちてくる。

止まった後も、しばらく息があって手足が動いていたが、五分ほどで動かなくなった。

英語の発音がうまいのが気になる。ネイティブではないが、たいがいの日本人よりはまともな発音だ。諜報部隊の分析官だろうか。

後ろから撃った時のマズル・フラッシュを誰か

が見ていたらしく、そこへ背後から重機関銃が発砲される。曳光弾が放物線を描いて暗闇に吸い込まれていく。反撃は無かった。

「ムラさん、今の連中は何でしょうね……」

岩永は、三メートルほど離れたところに陣取る女房役の達村茂人曹長に訊いた。

「反革命分子という連中じゃないですか。たぶん脱走でも凶った連中が、鉄砲玉代わりに放り出されたのでしょうか。こちらの戦力を見るために」

「このまま諦めてくれますかね」

「夜は長い。はじまったばかりですよ。少なくとも、向こうはいつ仕掛けるかを選べる。きつと本隊は、煙幕でも張りつつ攻めてきます」

風は東風。つまり、自分たちの背中から敵に向かって流れている。煙幕を張るには、頭上を越えて滑走路側に撃ち込む必要があるが、まだ迫撃砲をもっているかどうかはわからない。あるいは、

それを撃てるかどうかも。

ただ不安なのは、風が弱いことだ。一度広がりはじめた煙幕は、長時間留まることになる。

「赤外線フラッシュライトは、大丈夫だよね？」

「気乗りはしませんが、味方が勘違いしないでくれることを祈りましょう」

「歩兵って、損な商売だな……」

「いやあ、陸戦の華でしょう。生き残ってみせませよ」

曹長は自信ありげに言った。

最初の攻撃から三〇分経過したが、静かだ。

まだ三〇分しか経っていないことに岩永は苛つき、がっかりもしたが、これが戦場なのだ。

下真田丸からほぼ真北四〇〇メートルに、ほんの三〇メートル四方の小さな林があった。

そこに、サイレント・コアの六名が潜んでいた。

二名の狙撃手と、それを守るための四名の隊員だ。滑走路北にある住宅街に潜む敵を圧迫し、山の上の敵兵の狙撃が目的だった。ここからは、六〇〇メートルから七〇〇メートルはある。しかも下から上を狙う狙撃で高い技術が必要だ。

緒戦は、彼らの出番は無かった。ただじつとギリースーツを被り、地べたに這いつくばって敵の動きを探る。

中国軍は、爆撃でできた孔と孔を繋いで、山の稜線跡に塹壕を掘っていた。上空を飛ぶスキヤン・イーグルで、それが見えている。

おそらく、その塹壕が完成してからの本格攻撃だろうと彼らは睨んでいた。

338ラプア・マグナム弾を使うドイツ製のDSR-1狙撃銃をバイポッドに固定したりザードこと田口^{たぐち}苾太^{しんた}二曹は、手元に置いた豆電球の下で、敵の配置を熱心にメモしていた。スポッター役の

ヤンバルこと比嘉^{ひが}博実^{ひろみ}三曹は、暗視双眼鏡で前方をくまなく監視している。

その後では、分隊長以下四名が木陰に身を隠して周囲に注意を払う。停電しているため住宅街に灯りはなく、今のところは敵の気配も感じられない。

「照明弾が欲しいな。目が疲れるし、バッテリーも勿体無いし」

比嘉がそうぼやく。「さっさと片付けたいけど、どのくらいで攻めてくるか……」

「三波は覚悟した方がいいだろうな。だが、さっきの連中は歩兵でもなかった。おそらく、歩兵が足りてないんだろう。嫌がる分析官たちに無理強いて銃を持たせている。どこかで避難計画が狂ったか、もともと避難させる意図など無かったか」

「夜明けまで続くのは、勘弁してほしい」

比嘉は、あくびをかみ殺しながら言う。

自分らは、ハワイから休む間もなく飛んできたのだ。輸送機の中、中継基地の硫黄島いおうで短い睡眠はとれたが、疲労が蓄積していた。

「さっさと攻めてきてくれなきゃ、寝ちまいそうだ……」

「寝てろ。スキヤン・イーグルも飛んでいるし、俺たちの前方には機動団がいる。いざとなれば、弾の音が起こしてくれるさ」

「じゃ、遠慮なく」

比嘉は両腕を組んで顎を乗せ、本気で寝に入っ
た。

サイレント・コアを率いる土門康平どもんこうへい一佐は、指揮車のMRAPブッシュ・マスターのキャビンで、こちらも腕組みして睡魔と戦っていた。

硝煙の臭いは一瞬だった。

戦闘が一段落すると、ただちに弾薬補給がはじまる。土門は、機動団が持つ照明弾の残弾を聞いて、節約するよう要請した。

長い夜になるだろう。暗視ゴーグルは、完璧ではない。隊員らは不安だろうが、上空は複数の偵察ユニットが舞っている。それに敵も暗視ゴーグルが必要ならば、条件は互角だ。

スキヤン・イーグルをコントロールするガルこと待田晴郎まちだはるお一曹は、土門の隣で二三インチ・モニターにかじりついていた。

モノクロの画像の中には動く者はおらず、こちらも陣地に籠もったままで、二〇分も三〇分も静止画を見ているようだ。

「変化を探せ……」と呟きながら、待田はその作業に没頭していた。

そのモニターを監視しているのは待田だけではない。モニターを三台並べて、三人で監視してい

る。だが、やはり最初に異変に気づいたのは待田だった。

山の反対側の中腹から、迫撃砲を担いだ兵士たちが出てくる。待田が声を上げた時には、すでに砲を据えつけていた。

三門の迫撃砲から、砲弾が発射された。続けざまに、着弾修正も無しに少しずつ角度を変えながら撃ってくる。

「オールハンド、着弾インカムینگ！」と叫ぶと、土門が飛び起きる。

砲弾は、ブッシュ・マスターを僅かに越えて一〇〇メートル滑走路側で爆発した。煙幕弾だ。立て続けに、煙幕弾が爆発する。

この北西エリアを囲むように煙幕弾が降り注いだ。味方の迫撃砲が反撃した時には、敵は穴蔵に引っ込んでいた。

「見えるか？」と、土門が待田に聞いた。

「戦場全域を覆い隠すには、全然足りませんね。ただ、短い時間だけなら、視程を制約するでしょう。三〇〇か、あるいは二〇〇メートル程度に」ここで、対抗して味方の照明弾が上がりはじめた。土門は、M32グレネード・ランチャーを担ぐと、ブッシュ・マスターを降りる。

いったん、下真田丸の塹壕に入る。敵はまだ姿を見せなかった。

照明弾が、頭上からゆらゆらと落ちてくる。まだ山肌を視認できる。後続の発射はないから、これが少し濃くなる程度だろうと土門は判断した。

だが、ここで意外なことが起こる。

風が、東の滑走路側から吹いていて、煙幕は西へと流され山肌に当たり滞留しはじめた。つまり、予想した以上に濃くなりはじめたのだ。視程がどんどん落ちていく。

土門は、航空部隊に援護を要請した。

下が見えているうちに、攻撃するチャンスがあればよいがと考えながら。

イギリスから買い付けたヘリ空母[〃]ほうしよう（七万六五〇トン）を母艦とするF-35B（短距離離陸^S・垂直着陸^T）飛行隊は、急遽編成されたため、パイロットは海自陸自の混成部隊で成り立っていた。陸自は、回転翼のベテラン・パイロットから編成されている。

副隊長の村田護人^{むらたもりと}三佐は、パイロットの村田三兄弟妹の真ん中で、元はロングボウ・アパッチ戦闘ヘリのパイロットだった。兄は航空自衛隊でF-35A飛行隊の隊長。妹も陸自で偵察ヘリに乗っていたが、今は同じ飛行隊で戦闘機に乗っている。ポーツマスからの回航では、イギリスから買い付けたF-35Bに乗り込み、八面六臂^{はちめんろっぴ}の活躍で空

母を守り南シナ海まで辿り着いた。この戦争で一番敵機を撃墜したパイロットになったが、彼自身、自分が撃墜した敵機の数は正確に記憶してない。

その村田三佐は、海南島南東沖合に展開する輸送艦[〃]おおすみ（二万四〇〇〇トン）に、これもイギリスから買ったアパッチ・ロングボウ戦闘ヘリの最新型であるアパッチ・ガーディアンで着艦し、武器弾薬の補給を待っていた。

パイロット用のブリーフィング・ルームに降りていくと、うす暗い室内は重い雰囲気漂っていた。

そこには、思いがけない人物がいる。目達原駐屯地^{めたばる}でお世話になった葉室泰徳^{はむろやすのり}二佐だった。西部方面隊西部方面ヘリコプター隊の副隊長だが、村田が教育部隊を出て初めてUH-1汎用ヘリの操縦棒を握った時の上官だ。

村田は固い表情で一礼すると、シートに深々と腰を沈めて缶コーヒーを飲んでいた葉室の隣に座る。

だが葉室は、意外にも笑顔で村田を出迎えた。

「珍しいね、なんでここに？ 35Bでここに降りても、発進は苦労するだろう」

「今日は、ガーディアンです。35Bはちよつと酷使しすぎで、中国の攻勢が弱まった隙にそれなりの整備をしようということになりました。実はイギリスから整備中隊が乗り込んできました。こつそりと、ですが」

「そうなのか。ああ、活躍は聞いているよ。でも、妹は拙いんじゃないか？ 何かあったら、ご両親が悲しむ」

「本人が希望したことです。やつと慣れたみたいですし、大丈夫でしょう。それより、目達原駐屯地のことなのですが……」

もともとロングボウのパイロットだった村田は、最後はロングボウを集めた目達原駐屯地にいた。そこから出世の階段、幕僚任務で第一ヘリコプター団に出たところで、戦闘機パイロットの募集に応じたのだ。

「何か、聞いてますか？」

「いや、ニュースは何もない。というか、基地と全く連絡が取れないんだ。実働部隊はほとんどいなくなったから、機体の損失はないとだけ聞いているが」

葉室は周囲に誰もいないことを確認してから、重い口を開いた。

「……実は、基地に降りる寸前のCHが一機いた。着弾直後、上空を旋回して動画を撮った。おそらくクラスター弾搭載タイプと、硬目標破壊用の単弾頭による攻撃だ。基地は潰滅したし、正門近くでの着弾もあって、デモを行っていた平和団体や

機動隊が大勢巻き込まれた。……惨状だよ。報告したパイロットは、B-52の絨毯爆撃を受けたようだと言っていたらしい。たぶん、何百人も死んだ……」

「なんであそこが狙われたんですか？ 他に重要なターゲットは、いくらでもあったでしょう」

「韓国としては、吟味した上でのことだろう。ペトリ部隊で守るような重要基地でもないから、迎撃される心配は無い。ヘリ部隊はほとんど出払っていて、損害は基地施設だけに留まるから、警告にはなっても犠牲は最小限にできると考えたんだろうな。佐世保の方は、イージス艦が半分は叩き墜したらしいが」

「サボタージュというのは、本当なんですか？」

「どうかなあ。韓国大統領は部隊が襲撃を受け、ミサイルが乗っ取られたため発射されたと弁解したらしいが、こっちが信じる理由はない」

「葉室さんの部隊が、占領した空軍基地への補給に飛んでいたんですよ」

「そうだ。あそこはわれわれがいる限り、絶対に陥落しない。半日で数百トンの補給物資を搬入した。輸送艦も補給艦も、もう空だよ。今は、トリトン島に物資が到着するのを待っているところだ。CHを止めておく場所がトリトン島に無くてね、こっちに戻ってきた。君らには邪魔になってしまい申し訳ないがね。敵の攻撃は、どう？」

「第一波は威力偵察でした。夜明けまで何波かの攻勢があるだろうという話です」

「君が戦闘機に乗っていないなくても、防空は大丈夫だろうな」

「空自部隊が遥か上空で見張っていますから、われわれは地上からの携帯ミサイルを警戒するだけです」

「滑走路の補修は夜通しやっているから、夜明け

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。